



山形県立霞城学園高等学校  
職員研修会 平成29年9月6日(水)

# アクティブラーニング を考える

山形県立庄内総合高等学校  
教務主任 五十嵐一明

1

## 本日の内容

- 庄内総合高等学校の紹介
- ウォーミングアップ①②
- 本校の取り組みについて
- 質疑の時間
- グループワークの実践

2

## 山形県立 庄内総合高等学校



昭和2年 山形県余目実科女学校  
として誕生  
平成7年 県内初の単位制・総合学科設置  
今年度 創立90周年

教育の柱は、3年間の系統的なキャリア教育。1年次「自己理解」、2年次「自己表現」、3年次「自己実現」をテーマに、様々な体験活動と多くの発表の機会を盛り込み、コミュニケーション能力の育成に力を入れ取り組んでいる。



## 山形県立 庄内総合 高等学校



創立90年。山形県初の総合学科高校。キャリア教育。庄内町をあげてのあいさつ運動を展開。地域連携。3クラス定員（今年度3年次2クラス）現在270名在籍

4

### 事業計画（平成28年～30年文部科学省指定）

<山形県教育委員会>  
山形県立庄内総合高等学校を実践研究校とし、以下の調査研究事業に取り組む。

- 1. 「山形県高等学校基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業検討会議」の取組**
  - ・基礎学力向上に係る指導方法、カリキュラム・マネジメントの研究
  - ・試行テストの結果の活用及び指導方法の研究と普及
  - ・CBTによる試行テストへの対応
- 2. 実践研究校における研究・実践内容**
  - ・校内学習指導改善推進委員会の取組
  - ・アクティブラーニングの推進（学力の3要素が反映された授業デザイン）
  - ・ICT機器の活用と学習評価の研究
  - ・基礎学力向上に係る視察研修及び校内指導改善教員研修会の開催
- 3. 高等学校基礎学力テスト（試行テスト）実施体制の確立**
  - ・問題収集・問題作成・試行テスト実施及び環境整備体制の確立
- 4. 高等学校基礎学力テスト（試行テスト）の活用検討**
  - ・試行テスト活用体制の確立
  - ・テスト結果の活用の検討

【実践研究校：山形県立庄内総合高等学校 総合学科】 —（文部科学省HP掲載）

<調査研究のねらい>  
山形県教育委員会は、山形県立庄内総合高等学校（全日制）を実践研究校とし、教育課題に対応するため、基礎学力の着実な定着に係る調査研究を行い、高等学校の学習におけるPDCAサイクルの確立を目指すとともに、研究成果を県内外に広く普及させ、高等学校基礎学力テストの円滑導入や学習改善のための取組みの推進を図る。 —（事業計画書より）

5

## 【チーム庄総】の取組み 授業改善

大切なことは、  
教師がどう教えるかではなく、生徒がどう学ぶか。  
授業を変えれば、学校が変わる！

6

## 授業研究実施月間(7月4日~15日)

テーマ

### 「コミュニケーション能力の育成と基礎学力の定着」

- ・アクティブラーニングを取り入れながら、生徒の基礎学力の向上・定着を図る授業の工夫を。
- ・教員同士の指導技術の継承や連携強化を図り、学校全体として授業改善に取り組む。

7

8月30日(火) 職員研修会

### 「職員アンケート」実施 (基礎学力とAIについて)

↓  
＜アクティブラーニングの基礎＞講演  
溝上慎一 京都大学教授

8

8月31日(水)

第1回山形県高等学校基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業検討会議

公開研究授業

#### 【アクティブラーニング型授業の実践】

1. 国語総合(古典) 1年1組32名 齋藤昭子教諭
2. 歴史探究 3年H群21名 白旗悠 教諭
3. 音楽Ⅱ 2年23名・3年3名 工藤幸子教諭

9

8月31日(水)

第1回山形県高等学校基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業検討会議

#### 1. 第1回調査研究事業検討会議

- ・県教育委員会あいさつ(津田浩:高校教育課長)
- ・研究指定校長あいさつ(高橋たず子:庄内総合高等学校校長)
- ・自己紹介
- ・事業説明(小池正春:高校教育課指導主事)
- ・研究指定校説明(五十嵐一明:庄内総合高等学校教務主任)
- ・各校現状報告・授業参観の感想等(各中学校・高等学校)

#### 2. 講演 溝上慎一 京都大学教授 「アクティブラーニング型授業への転換」

10

中間反省会(10月5日実施)

## 基礎学力

を本気で  
定着させるために

### 【チーム庄総】は

何をすべきか?

11

「基礎学力定着」のための課題

1. 学習習慣の確立(家庭学習も含む)
2. 義務教育段階の「学びなおし」
3. 生徒が興味・関心を持てる授業の工夫
4. 授業ルールの徹底。授業以前の凡事徹底
5. 評価の検討(テストの内容など)
6. 進路目標の設定

チョイス!

12

## チーム庄総

### <カオス>

1. ◎富藤昭子(国)、土門和宏(理)、菅原和恵(英)、菅原恵美子(家)、榊原勝典(商)

### <フラットタイヤー>

2. 小松久美子(国)、桐崎一子(英)、高橋尚(体)、佐藤恵(家)、◎水口修一(商)

### <チームツーフー>

3. 佐藤雄樹(国)、本間義久(理)、◎佐藤勇志(体)、池田裕子(地公)、五十嵐良(英)、高橋たず子(校長)

### <ポジティブ>

4. 上野詩織(国)、井上鉄也(教)、工藤圭子(音)、◎井本吉彦(体)、大泉亜矢(英)

### <クールファイブ>

5. ◎村上美紀(地公)、青山聡美(商)、五十嵐一明(英)、松浦敏行(工)、秋野昌弘(教頭)

### <グリ and グラ>

6. 白蓮依(地公)、中川淳(理)、◎小松原直樹(工)、南葉和美(教)、皆川祥子(家)

◎チームリーダー

## 研究授業週間実施(10月31日～)

テーマ

### 「基礎学力の定着とアクティブラーナーの育成に向けて」

- ・基礎学力の定着を図るための、義務教育段階の学び直しを取り入れた授業の展開
- ・アクティブラーニング型授業の実践と研究
- ・ICTを取り入れた授業の研究

14

### <目的>

【本校生徒の基礎学力定着とアクティブラーナーの育成を目指す。また全職員でALやICTを活用した授業の研究に取り組む。】

### <期間>

- 第1期 10月31日(月)～11月7日(月)  
第2期 11月14日(月)～11月18日(金)  
中間授業研修会 12月9日(金)  
第3期 12月12日(月)～1月16日(月)  
第4期 1月23日(月)～2月3日(金)  
第2回県検討会議 2月3日開催

15

## 中間授業研修会(12月9日実施)

テーマ

### 「生徒に基礎学力を身につけさせるために必要な取り組みについて」

- ★1 具体的にどのような取り組みをしたらよいと考えるか。
- ★2 ★1で挙げた取り組みをどのように実施したらよいと考えるか。

16

## 第1回試行テストの実施 1月16日(月)～26日(木)

CBT(computer based test)  
RST(reading skill test)  
英語スピーキングテスト  
アンケート調査

17

## 「授業改善」の取り組みを通じての変容(教員)

1. 基礎学力の定着を意識した取り組みをしている。 100%
2. 「AL型授業」を意識した取り組みをしている。 89%
3. 授業改善の取り組み(全員研究授業)をしているが、自分自身の授業において変容がある。 32%
4. 自身の授業改善を通じて、生徒に変容がある。 42%
5. 本校の生徒は「アクティブラーナー」になろうとしている。  
少しはある:32% あまりない:37% 全然ない:26% まだ:5%

18

## 「授業改善」の取組みを通じての変容 (生徒)

A(よく当てはまる) B(やや当てはまる) C(あまり当てはまらない)  
D(全く当てはまらない) 未(未回答)

・本校の先生方は授業の改善のために一生懸命  
取り組んである。

1年次: A 30.0% B 40.2% C 18.1% D 11.7%

2年次: A 26.8% B 47.9% C 16.9% D 8.4%

3年次: A 19.8% B 63.5% C 16.6% D

全体: A 25.4% B 51.1% C 16.9% D 6.6%

19

## 「授業改善」の取組みを通じての変容 (保護者)

A(よく当てはまる) B(やや当てはまる) C(あまり当てはまらない)  
D(全く当てはまらない) 未(未回答)

・本校は授業の改善に熱心に取り組んである。

1年次: A 29.2% B 51.4% C 18.1% D 1.3%

2年次: A 26.9% B 55.8% C 17.3% D

3年次: A 17.5% B 70.0% C 11.3% D 1.2%

全体: A 24.0% B 59.8% C 14.7% D 1.5%

20

## 平成29年2月

第2回山形県高等学校基礎学力の定着に向けた  
学習改善のための調査研究事業検討会議

### 1. 第2回調査研究事業検討会議

### 2. 講演 溝上慎一 京都大学教授 基礎学力定着に直結する授業改善について ーアクティブラーニング型授業の視点からー

21

庄内総合高校 調査研究事業報告書〈第一期〉  
京都大学 溝上慎一 教授の文章より

- 基礎学力の定着・向上をはかっていく上で、決定的に問題なのは、教室内での、良い意味での**教師の生徒に対するコントロールが甘いこと**です。
- 授業では生徒に「発表する」ことの意味づけを発表する側の生徒にも聴く側の生徒にも意識させる必要がある。一人ひとりが緊張感を持って臨む姿勢を培わせたい。

22

☆「アクティブラーニングをすることで生徒の基礎学力が身に着く」と安易に考えるべきではない。

○生徒自身が記憶しようという姿勢、点数が取れないと悔しいと感じる姿勢が成り立たないと、いくらアクティブラーニングを取り入れても基礎学力の定着には繋がらない。

○また、生徒に達成感、自己肯定感を持たせる意味で、生徒をどう本気にさせるのかの仕掛けの工夫、「本当に頑張る態度」を教師が本気になってどう育てていくのが鍵である。

23

○講義一辺倒の授業であれば、寝ているかうつ伏しているかの生徒が、アクティブラーニング型授業ではだらしない姿となって表れます。(中略)そこに表れた生徒の、教師の指示を聞いていない、だらっとしているそういう姿こそが彼らの**基礎学力の低さの表れ**なのです。

★教師には、人(教師)と人(生徒)とがホンキでぶつかっていく相当の気概と覚悟が要りますホームルームや学校全体の取り組みもあわせて必要です。大変ですが、この部分に基礎学力定着・向上に向けての本質的な課題の大半があると思います。

24

☆教師の質問や与えられる課題を自ら理解しようとする力、途切れそうになった集中力を自ら維持する力、進学校の生徒なら多くの者が持っている力が基礎学力の弱い生徒の多くにはありません。しかし、**ここが基礎学力の定着や向上をはかっていく最大のポイントです**。問題がわかれば、対処する課題も見えたというものです

★そして、ここを乗り越えられれば、あとは、ワークシートの記述内容、理解を定着・発展させるためのふり返りや小テストの実施、家庭学習の時間などを見ていくこととなります。次回伺うときには、ここに議論が移ればよいと期待しています。

25

☆アクティブラーニング型授業の実践に関わらないことですが、授業づくりにあたってまず重要となるのは、**学習指導案の作成**です

◎ 最近では、**学力の三要素**やそれに基づく**評価規準**がしっかり埋め込まれての授業であるかが見るポイントとなっています。アクティブラーニングは学力の三要素をバランスよく具現化するための学習法ですので、とくに学習指導案は重要となります。

26

## 平成29年度 事業計画

1. 組織的な授業改善の推進
2. 先進校及び実践校視察・研修
3. A L ・ I C T の更なる研究と実践
4. ベネッセとの連携（効果測定）
5. カリキュラムマネジメントの研究
6. 中高の連携（授業研究等）

27

## 講師プロフィール

<http://smizok.net/>

1970年1月生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学高等教育教授システム開発センター助手、2000年講師、2003年京都大学高等教育研究開発推進センター准教授。2014年より教授（現在に至る）。大学院教育学研究科兼任。教育アセスメント室長。京都大学博士（教育学）。



日本青年心理学会常任理事、大学教育学会常任理事、『青年心理学研究』編集委員、『大学教育学会誌』編集委員、『Journal of Adolescence』Editorial Board委員、公益財団法人電通育英会大学生調査アドバイザー、学校法人桐蔭学園教育顧問ほか、大学のAP委員、高校のSGH/SSH指導委員など。日本青年心理学会学会賞受賞。

専門は、青年心理学（現代青年期、自己・アイデンティティ形成、自己の分権化）と高等教育（学習と成長パラダイム、アクティブラーニング、学校から仕事・社会へのトランジションなど）。著書に『自己形成の心理学—他者の森を駆け抜けて自己になる』（2008世界思想社、単著）、『現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ』（2010有斐閣選書、単著）、『大学生の学び・入門—大学での勉強は役に立つ！—』（2006有斐閣アルマ、単著）、『高校・大学から仕事へのトランジション—変容する能力・アイデンティティと教育—』（2014ナカニシヤ出版、編著）、『活躍する組織人の探究—大学から企業へのトランジション—』（2014東京大学出版会、編著）、『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』（2014東信堂、単著）など多数。

28

## チューリップMLを作りました

中学高校に関するイベントや研究会の案内を受け取る、あるいは自由に投稿できるチューリップMLを作りました。全国の中学高校関係者に配信されます。情報を欲しい方、発信したい方はメンバー登録の上、どうぞご利用下さい。  
<http://kyoto-u.s-coop.net/tulip/index.html>

## 桐蔭学園の「授業見学」のご案内



◆桐蔭学園はAL型授業向上を目指して、外部からの授業見学をいつでも受け付けています。見学したい方は下記にご連絡下さい。  
担当：佐藤透 ([satohru@toin.ac.jp](mailto:satohru@toin.ac.jp))

一緒に勉強させていただきました。  
ご協力ありがとうございました。

「霞城学園高等学校」の益々のご発展と、ここにご参会の先生方のご活躍を祈念申し上げ、感謝の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。そして、またどこかでお会いしましょう！

LET' S BE ACTIVE !

山形県立庄内総合高等学校  
五十嵐一明

30

定通合同職員研修会① (H29.9.6)



平成29年度 「定通職員合同研修会②」

講演「生徒とのかかわり方のポイント～3年間を振り返って」

講師：キャリアカウンセラー 桑名 暢 氏

日時：平成29年 11月28日（火） 15：30～16：30

本事業開始時より相談活動・講座を中心として様々な事業にご尽力いただいた桑名先生より、3年間を振り返って教職員対象の講演を依頼した。

個別の相談活動で感じたことは「ダメ」な子は一人もいなかった。平成27年度に予め担任と個別の情報交換を行って面談を行ったが、生徒の「ダメ」なところ95%先生の不安5%という情報で、生徒の良いところは話していない状況だった。今後必要と思われる提言として4点を挙げた。

#### ①進路実現に向けた早い段階の取り組み

進路実現に向けての個別の弱点を共有し改善策を講じることが必要である。入学時にはその弱点は見えていると思うので、生徒に合わせた対策として少しずつ「できること」を増やすことである。卒業年次になって何とかしようと思っても時間が足りないので早期に行いたい。弱点は様々で〈学習意欲〉〈経済状況〉〈人間関係〉など、進路について幅広く考えることができる情報を与えることで意欲もアップする。特に〈人間関係〉がうまくいかない原因の一つは先に述べたように悪いところ探しをする癖がついていることである。「良いところ」に目を向ける癖をつけると改善のきっかけになる。進路指導でも生徒・教員ともに良いところ、できるところを認めて、次はこうしようという声かけをしたい。面接指導で回を重ねる毎に顔が曇っていくのは自信・意欲を失っている状態。先生方は求めるレベルにほど遠いために厳しく指導すると思うが、できないところというよりできるところを見てほしい。

#### ②必要最低限の情報収集

個別の面談で時間をかけてこれらの項目を確認していくことをお願いしたい。ここでも確認したいのは否定から入らないこと、保護者はあてにできないという前提で一つひとつ確認をしていくだけでも信頼感が生まれる。就職・進学ともに「応援している」と言葉で伝えることが生徒にとって何より嬉しいことばだということを覚えておいてほしい。（詳しくは別紙1・2を参照してください）

#### ③生徒に合わせた指導

面談をして霞城学園高校の生徒、東北の中でも山形県内の生徒は「協調性が強い」ということを感じる。協調性が強いと周囲（家族含め）に気を遣って自分の意見を言えない、声が小さいという傾向が強くなる。自分の進路であっても自分で決めるということが苦手な生徒が多い。こういう生徒には先生の見立てでかまわないので

複数の選択肢を与えて考えさせたい。この選択肢が生徒が基準をもつ契機となる。保護者の意見が強く「親が～」という生徒の場合、保護者に直接聞いてみると違う場合も多い。親の何気ない日常の会話で思い込んでしまうことも少なくない。

また、否定されることへの抵抗感が強い生徒には、教員側の考えを押しつけない、結論を出すというよりは話を聞く、応援する。根気強く声かけを行っていく。逆にすぐに結論（答え）を求めてくる生徒には慎重に対応する。たとえば、「私何に向いていますか？」と聞かれたら「たくさんあると思う、わからないな。」と答える。このタイプはこちら側の見立てを言っても納得しない生徒が多い。興味の有無、やりたいか、やりたくないかを丁寧に確認したい。

最後にできないことを無理にさせないという視点も大切。履歴書の志望動機や面接練習では〈長くまとまった文章〉であることに指導者がこだわることが多い。長く話すのが苦手な生徒にそれを要求しすぎると自信を失う。面接をするのは本人なので、どこまでならいいのか、本人と探りながら練習したい。

#### ④決めつけない指導について

まとめ

- (1) 思い込まない 生徒の日常生活で決めつけない。
- (2) なにごとも明確にする 生徒に与える情報は何となくではなく確かな調べをして提供する。恐らく・・・で決めつけない。
- (3) わからないことは聞く 噂やネット情報に振りまわされないようにする。





## 生徒との関わりのポイント ～3年間を振り返って～

キャリアカウンセラー  
桑名暢

◎3年間を振り返って…

今後必要と思われる内容について

①進路実現に向けた早い段階の取り組み

②必要最低限の情報収集

③生徒に合わせた指導

④決めつけない指導

### ①進路実現に向けた早い段階の取り組み

◎入学半年後の時点で進路実現に向けて弱点と思われることを共有する。

⇒学習意欲

⇒出席状況

⇒家庭環境（保護者との関わり等）

⇒コミュニケーション能力

⇒人間関係

※卒業年次の段階で進路実現が難しいと思われる理由の大半が入学時にわかっていること。

### ②必要最低限の情報収集

◎進学に関する準備チェックシート

◎就職に関する準備チェックシート

◎進路に関する本人の意見

◎進路に関する保護者の意見

### ③生徒に合わせた指導

◎自分で決められない生徒に対しては複数の選択肢を与える

◎否定されることが嫌な生徒に対しては指導者の考えを押しつけずまずは聞くことから

◎自分の意見よりも保護者の意見を尊重する生徒の場合は保護者に状況を確認

◎適性から考えようとしている生徒に対しては、まず興味の有無について考えるようにアドバイス

◎できないことを無理にさせない

### ④決めつけない指導について

■**思い込まない**（この生徒は意識が低い…指導に従わない…どうせ言ってもわからない…と決めつけない）

■**なにごとにも明確にする**（なんとなく…だいたい…こうらしい…と決めつけない）

■**わからないことは聞く**（うわさ話しやネットの掲示板、経験値だけで決めつけない）

	指導者向け <b>進学</b> 準備チェックシート	チェック
1	生徒の希望する学校の資料を見たことがある。	
2	希望する学校名と学科名を知っている。	
3	希望する学校の願書受付期間・試験日・定員を知っている。	
4	入学検定料・初年度の学費の総額を明確に知っている。	
5	学費納入のスケジュールを知っている。	
6	生徒が奨学金・教育ローンについて流れを知っている	
7	生徒が希望する学校の卒業後の就職先を7つ以上知っている。	
8	卒業後に就職先（勤務地）をどこにするか決めている。	
9	希望する学校卒業後の就職先の初任給の平均を知っている。	
10	生徒が学費の支払いと卒業後の就職先について保護者と話しをしている	
11	生徒がなぜ専門学校へ進学をするのか具体的に知っている	
12	生徒に進学することについて応援していると言葉で伝えた	

	指導者向け <b>就職</b> 準備チェックシート	チェック
1	生徒が就職を希望する理由を知っている	
2	生徒が高校生の就職活動のスケジュールを知っている	
3	生徒が在籍している高校の卒業生の就職先を10以上言える	
4	高校生の就職試験の内容を知っている	
5	希望する給料の額を知っている	
6	希望する勤務地を知っている	
7	興味のある仕事またはやりたくない仕事を知っている	
8	生徒に働いてからの良さを話している	
9	生徒に働いてからの大変さを話している	
10	生徒の良いところを3つ以上話している	
11	生徒の初任給の使い道を知っている・話している	
12	生徒に就職することについて応援していると言葉で伝えた	

### (3) 定時制職員研修会

「職員研修会」

講演 『『KAJO☆進路ハンドブック』の活用について』

講師：定時制進路課 田中 恵美

日時：平成29年 6月6日（火）

15：15～16：15



昨年度『KAJO☆進路ハンドブック』を作成し、定時制ではロングホームルームの活用、卒業年次が進路に向けて自ら準備を行えるように全生徒に配付した。その運用にあたって、この冊子を活用するための研修会を設けた。

具体的な活用の方法というより、どういう課題に対しての対策として編集したかという意図を共有してもらうことを優先した。そのためにまず、前掲の「IV 1 近年の定時制進路」についての資料をあげ、ここから読み取れること、考えられる問題点を話し合ってもらった。

本校のこれまでの課題は、①「卒業時の未決定者が多いこと」多部制・各1クラスのため、進路意識を持たせる指導は担任に任せられており、温度差がある。卒業年次になって俄に進路を考える生徒も多く、『働く』意識が低く応募先を選択できない。それが意識の低さと見え、進路未決定のまま卒業する。②「就職者の早期離職が多いこと」就職できた生徒も就職先の選択がアルバイト感覚で、ちょっとした壁にぶつかるとすぐに離職してしまう。これらの課題への対策として、丁寧に「ライフプラン」「働く」ということを考えさせることが必要である。

次に、本事業の外部人材による相談活動から学び得た「個別の進路相談・面談」に対する姿勢についての話を行った。本校生徒は不登校経験のある生徒も多く、小中学校にほとんど通えなかったということも少なくない。そのため、年齢相応の経験値が不足し、自らの進路についても現実味を感じられない「夢」を語ることもある。担任はこれまでの教員歴で培った進路指導に照らし、現実をふまえたルールに導こうとする。教員も親も「夢」の否定から入るので、思いをつぶされたという気持ちがくすぶり続ける。低学年次の個別の進路相談では、まず①話を聞く。②その希望を叶えるための情報を提示する。③タイムスケジュールを提示する。ことが必要である。否定するのではなく、叶えるためには努力が必要であり、それをいつまでにするのかという意識を明確にする。努力すればできる道を知って、どうするかを生徒本人に考えさせることが重要である。進路実現に向かって活動する期間、その結論・結果の期限を設けることで、成果の有無による「自分で決めた選択」に納得できるはずである。

以上2点、社会で生き抜くことのできる人材を育てることを目的として活用してほしい。（補足として、具体的な冊子内容や資料について説明をした。）